



『北の大地に挑む農業教育の軌跡』

公益財団法人北農会 農業技術コンサルタントチーム内
「北海道における農業教育の軌跡」編集委員会編

〈評者〉 北海道大学名誉教授 七 戸 長 生

基本的な観点

本書は、北海道の開拓が始まつてから、「日本の食料基地」としての地位を築くに至つた現在までの約一四〇年間に及ぶ農業教育の流れを、細大洩らさず、網羅的・体系的に整理した大著である。その端緒は、明治初年の開拓使の官園での実習教育に源を発するが、その後はさまざまな時代画期を背景にして、全道各地で農業を発展させる原動力としての人材育成のための教育が繰り広げられた。その足跡を足掛け四年間にわたりて克明に辿り、多くの文献・資料に当つて編集・整理してきた同編集委員会の皆さんに対して、深甚の敬意とお祝いを申し上げたい。また、この種の出版物の刊行が極めて困難な情勢下にもかかわらず、所期の上梓

当研究所の会員である公益財団法人北農会、農業技術コンサルタントチーム内の編集委員会による「北の大地に挑む農業教育の軌跡」が昨年一〇月に発刊されました。

北海道農業の黎明期から今日までの農業教育が、多彩な執筆陣によって四編構成で整理・解析されています。本道農業教育の貴重な記録であり、これから農業を示唆する意義のある出版であることから、当研究所として出版助成をいたしました。

北海道大学名誉教授七戸長生氏（当研究所の元所長、顧問）に本書の紹介と、この出版の北海道農業についての意義を解説していただきました。
なお、本評は北農八一巻第一号（二〇一四年一月発行）にも同時掲載されています。

を達成された同刊行協力会の皆さんに対しても心からの祝意を表

するものである。

ところで、近年的一般的な風潮からいえば、農業教育に対する関心はさほど高くはない。さらにそれが一〇〇年以上の長期間にわたる歴史を綴つたものであるということになると、「是非とも、今すぐ手に取つて読んでみたい」という気持ちになる人は、意外に少ないかもしれない。「何となく堅苦しく、高級過ぎてなじみにくい」というのが、率直な感じであろう。しかし「激動の時代」といわれる現代の様々な難問に直面して、その打開に頭を悩ましている人ならば誰しも、この当初の、とつつきにくさ、喰わ

ず嫌い、を乗り越えて、ここから真剣に学び、考えていくことが求められている課題があることに気づくに違いない。それは、それぞれの時代画期の要請に応えて、いかにして「有為の人材」が育成され、世に送り出されてきたか、という観点である。

いくら情報化の時代だとしても、ネットで安直な検索をどんなに重ねても、今後五年先、一〇年先に優れた手腕を發揮する能力を秘めた人材を発掘することはできない。と言つてこのまま成



株式会社北海道協同組合通信社発行・販売

(TEL 011-209-1003)

2013年10月刊 A4版 448頁 上製本

表紙カバー2色刷り

定価3,000円(本体2,857円+消費税) 送料600円

り行きまかせで必要な人材は確保できるのか。それは不可能だろう。もしそうなら、今、大急ぎで考えなければならないのは、そういう人材をこれからどうやってつくり、どうやって確保するか、であろう。その時に頼りになるのは、少々回り道のように見えるが、過去五〇年、一〇〇年の歴史をひもといて、先人達がどのようないい努力を重ねて、それぞれの時代に即応した人材を育成したか、その足跡を真剣に辿りながら、現代にマッチしたあり方を具体的に考えることであろう。そういう自前の思索と検討の有力な素材を提供してくれているのが本書である。少々堅苦しいとか、苦手だとかゼイタクなことを言つてはいる場合ではない。

本書の構成と概要

本書は全体で四四八頁に及ぶ大冊であるが、次の四つの編から構成されている。まず第一編「北海道農業教育の概要」では、北海道農業が形成されてから、今日のように目ざましく展開するまでの一四〇年を、農業形成期（一八六九～一九二〇年）、農業再編成期（一九二一～一九四五年）、農業転換期（一九四六～一九七〇年）、そして農業高度展開期（一九七一～現在）の四期に分けて、それぞれの時期の農業教育の発展の特色を辿り、さらに各時代画期に打ち出された農業教育の基礎理念や、各種の教育活動

の特色が追跡されている。続く第二編「北海道農業教育の系譜別のあゆみ」は、教育推進の中心を担う「学校教育と施設教育」について代表的な一七の組織の展開系譜を辿りながら詳述し、次いで各種の研修事業や研修施設で展開された農村青年を主な対象とする研修ならびに生涯学習の教育について一四の事業を取上げて詳しく紹介している。さらに農業確立に多大の貢献を果たしてきた農業試験場をはじめとする研究機関や農協系統組織、さらには農業改良普及制度などの農業技術指導について七つの組織活動の系譜を取り上げて検討し、近年の農業担い手育成のための活動や農業教育担当者向けの教育活動なども幅広くとらえて紹介している。したがって第一編の歴史の流れを縦糸とすれば、第二編ではそれぞれの地区や組織のニーズに応えて展開された農業教育のさまざまジャンルの活動が、横糸のように実際に細かく、細大洩らさずに追跡されていて、農村における幅広い人材育成・確保の概要が、まるで戦国絵巻のように繰り広げられている。

そして第三編では、この絵巻物のような編成に「血のかよつた肉声」を盛り込む形で、主要な組織・機関における指導者の回顧や感想、そしてそれらの指導者の薰陶を受けた、かつての研修生だつた農業者・農村指導者たちの回顧や感慨、が収録されている。この総数六六人に及ぶ「肉声」の部分は、まさに本書の压巻ともいふべきものである。そこでは人材育成の根底にある一期一会の

「人と人との出会い」がいかに大切であるかを如実に物語つていると同時に、それを今日の時代状況に即応した形で確保するには、どのような工夫が必要となつていて、を深く考えさせてくれるものとなつていている。

つまり農業技術の指導・教育はいかにあるべきか、という点に関して、それぞれの事例は当然に時代的な特色（制約）をもつてゐるが、作物の栽培にしても、家畜の飼養にしても、基本のキから真剣に、そして誠実に学ぶことが必須であり、同じ世代の若者が親元から離れて、多くの若者達と合宿状態で競い合つて修練を積むことが、彼らの狭い見聞と技能をいかに画期的に拡大し、農業の未来に対していくかに有望な希望をもたらしてくれるか、を誠に雄辯に語つているのである。

さらに第四編では、主に第二編ないしは第三編で扱つた文献・資料を活用する形で、農業の歴史と教育の歴史を網羅するトピックを紹介し、編集担当者の「執筆余話」もそれぞれに含蓄に富む形で紹介されていて、第三編で与えられた感動の余韻を一層強く伝えるものとなつていて。

本書が示唆するもの

さて与えられた紙幅が迫つてきたので、以下では本書によつて

觸発された、今後の北海道の農業教育の展開方向を示唆する論点として、さしあたり次の三点をあげておきたい。

まず第一に、農業という産業の特性として、特定の地区範囲に密着する形で進められる生産活動（作物栽培といい、家畜飼養といい、特定地域の農地にへばりつかざるを得ない）の制約を、いかにして打破するかという課題があげられる。これは、農業者の視野の狭さをもたらすばかりでなく、他地域、他産業の人達とのコミュニケーションの不足、ひいては自己主張や宣伝力の不足となつて、はねかえつてくる。このことは、しきりにグローバル化が叫ばれているさ中においては、何としても克服しなければならぬ課題である。したがつて求められている人材は、作物栽培や家畜飼養のスペシャリストのレベルにとどまるものではなく、高度のスペシャリストであると同時に、広い視野と組織化能力を持つたゼネラリスト（加工、販売や組織運営の能力）が必要であり、海外を含めた主要な地域についての情報に精通していることも望まれる。実は、本道の農業形成期から農業再編成期にかけて「新しい農業」として注目された酪農の先進農家の多くは、そのような能力を備えたリーダーだった。そして彼らの畜舎に住み込みで働きつつ学んだ人たちの各地における活動の足跡こそ、この課題解決のヒントになろう。

第二に、これから農業の主流が家族総働きの労作經營から脱

皮していくとしたら、「雇う、雇われる」社会関係や、チームワークが重視される組織関係に対する適応能力が必須となる。旧全寮制の合宿教育には、この点でのメリットもあつたと考えられるが、新しい時代に即応した研修体制としては、例えば各地で活躍中の酪農ヘルパー制度をもとにした新しい展開方向があるのではないかろうか。

第三に、一定の地区に立地して、希望にあふれる農業を築くには、個々の農家・農場の成長・発展が望まれるが、同時に追求されなければならないのは、どのようなムラを作るか、つまり、開拓初期以来の散居制の作りから脱皮して、営農面では従来のとおり散居制をとりつも、生活面では密居制的な居住区画制を採用するといった折衷方式をとることが考えられよう。こうして、在來の深刻な過疎化に悩むムラの状況を一変させて、地域産業社会の都市生活に勝るとも劣らないムラを築くには、どういう仲間と、どのような社会生活を組織することが求められるのか、広く社会的な意見のやり取りを存分に駆使できるコミュニケーションを開ける能力も重要な課題となろう。これは、農地制度の改編とも無関係ではないと思われる。これらの課題は、とうてい単一の人材育成組織では十分に展開できないと思われるから、さまざまな組織や地域での緊密な連繋・分担が必要であろう。